
かみさまといっしょ

銀丈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみさまといっしょ

【Nコード】

N1780Z

【作者名】

銀丈

【あらすじ】

祖母が危篤との報せに、両親と共に祖母の住む山奥の神社を訪ねた琢磨。

こんなところにさえいなければ、と「神」への怒りを抱く彼に、祖母は言った。

「神様をお願い」

琢磨でなければならぬのだと、言うだけ言って死んでしまう。

困惑する琢磨の前に、本当に神様が顕れた。
。

序／お社へ

祖母が危篤。

急な報せを、源琢磨は走り出した車の中で聞いた。

しかもその祖母が、床に伏せりながら琢磨を呼んでいるのだという。

放課のチャイムが鳴った直後の高校正門へ車で乗り付けて、出てきた男子生徒を車内へ引きずり込むなり走り出す。両親が一人息子にやらかしたとはいえどう考えても通報沙汰の手際も、事情を聞いてしまえば文句は出なかった。

とはいえ、もう少し現状を把握したかった琢磨は、アクセルペダルを踏みっぱなしの鬼気迫る父ではなく、同じ後部座席で隣に座っている蒼ざめた顔の母に訊いてみた。

「母さん、おばあちゃんそんなに悪いのか？」

「元々山奥に独りで暮らしていたし、体を壊しても、どうしてもってお社を離れなかったからね。お医者さんが診に来たときにはもう、随分ひどい状態だったらしいわ」

琢磨の脳裏に、寂れきった神社の境内で竹箒を片手に笑う祖母の姿が浮かんだ。

琢磨の祖母は、琢磨が物心つく前にダム湖に沈んだ父の故郷、源村で巫女をしていた。

村がダム湖に沈んでなくなり、人が方々へ散っていく中、祖母は『神様が寂しがるから』と独りダム湖のほとりへ移設された神社に残ったのだ。

幼い頃、夏休み冬休みが来るたびそこへ帰省しては遊んでもらっていたが、しばらく会わないうちにこんな報せがあるとは思ってもなかった。

「何が神だ」

行く手を見据えたまま、琢磨の父の押し殺した低い声が車内にこ

ぼれた。

「何度も一緒に暮らそうと誘ったのに……ありもしないもののために何やってるんだ……！」

そうだ、と琢磨も自分の心がささくれ立っていくのを感じた。

いい歳をした大の男として口に出す気こそないものの、使い捨てるカイロを捨てるときさえありがたうと感謝して、使わないのに手元に置かれる道具はかわいそうだ、と持ち物にスベアを用意しない、そんな優し過ぎる祖母を、琢磨は大好きだった。

祖母の優しさを振り返し、ひとりぼっちで暮らさせ弱らせるような理屈は絶対に間違っている。

それが神だというのなら、神なんてもの、いてたまるものか。

き／さよ／なら、おひさし／ぶり

1 - 1

一晩ほぼノンストップで走り続けた昼下がりに、ダム湖のほとりの神社に着いた琢磨と両親を出迎えたのは、白衣を着た男女二人組だった。

「源さんの息子さん方ですね　後藤です」

ジャケット代わりに白衣を羽織り、首には聴診器、といかにも町医者といった風情の小柄な初老の男が、琢磨の父に白髪交じりの頭を下げる。

「……カナハ」

飾り気のない服にやはり白衣を羽織った長身の若い女が無表情のまま目を伏せ、かすかな会釈と共に名乗る。

琢磨は思わず女を凝視してしまっていた。美形だ、というのが第一だが、その跳ね気味の髪は銀色で、眼は深い青色、明らかに日本人の造作ではない。

その視線に気付いたらしく、琢磨の父を案内しかけた後藤が琢磨に声をかけた。

「遠い国から、勉強に来ているそうだよ」

「そうなんですか」

「そう」

琢磨の相槌に本人がうなずき、一瞥^{いちへつ}だけ投げて後藤と共に琢磨の脇を抜けていく。話はふくらまないが、かといって関わりを拒絶するようなトゲも感じない。どうやら、大変にシンプルな人柄らしい。

「こちらです、といつてもご存知だとは思いますが」

案内された先の和室で、年老いた女性が床にしていた。

「母さん」

「お義母さん」

「おばあちゃん！」

口々に呼ばれ、彼女はうつすらと目を開けた。

「ああ……錬磨れんまに、朱鷺とせ絵さん。それに」

すつと笑みの形に目が細まる。

「琢磨。来てくれて……ありがとうね」

1 - 2

「おばあちゃん」

つぶやきながら祖母の傍らに腰を下ろしたきり、琢磨は口を開くことができずにいた。

素人目に見ても、弱っている。穏やかな笑みをたたえた表情はそのままだが、記憶の中の祖母は立ち姿ばかりで、こうして上体さえ起こさず横になっている姿はほとんど覚えていない。雰囲気そのものにももつと張りがあった。

横になったまま、祖母は穏やかな眼で琢磨を見つめている。

祖母の容態を詳しく訊くため、両親は後藤やカナハと共に離れた部屋へ去り、今この場には琢磨と祖母の二人きりだ。

沈黙に耐えきれず、琢磨は口を開いた。

「おばあちゃん……元気だった？」

元気なわけがない。そうであればこうして呼ばれることなどなかったのだ。

気まずそうな琢磨に、祖母はころころと笑い、そして咳せき込んだ。乾いた咳の弾みで上体が起きる。

「おばあちゃん！」

思わず腰を浮かした琢磨を手で制する、が琢磨は構わずその体を支え、背中をさすった。そして気まずそうな琢磨の表情が渋みを増す。どうしようもなく、祖母が軽く、そして小さく感じたのだ。

「元気だよ。……大きくなったねえ、琢磨」

「最後に遊びに行ったの、中1の夏休みだったっけ。オレもう高校生だぜ」

語尾が途切れる。小さな祖母の手が、寄り添っている琢磨の頭をなでていた。

思春期真っ盛り、いっぱしの男を気取りたい身としては照れくさいことこの上なかったが、祖母をむげにできず、人の目もないので、しぶしぶされるままでいる。

「ねえ、琢磨」

呼ばれて目を向けたものの、琢磨は思わず口をつぐみ返事をしそびれてしまった。祖母の眼はいつになく真剣な色を帯びていたのだ。

「ひとつ、頼みがあるんだよ」

「頼み？」

「私の後を継いでほしい」

「……え？」

「私のいなくなった後は、琢磨が神様をお祀り^{まつ}してほしいんだ」

「後を継ぐ？ お祀り？」

空白。言われたことがいまいちよくわからない。それでも、祖母の言葉は続く。

「もうすぐ、琢磨や錬磨、朱鷺絵さんとはお別れだ。そうしたら、このお社もなくなってしまっただろう。だからその前に、御神体を琢磨が持つて行ってほしい」

「ちよつと……ちよつと待てよ、おばあちゃん」

頼みの内容が頭の中にしみこむにつれて、琢磨の体に熱が湧き上がる。紛れもない、それは怒りだ。

「オレ、おばあちゃんの言うことなら何だって聞く。でも、それだけはいやだ」

「琢磨？」

「おばあちゃん、神様をお祀りするためにここでずっとひとりぼっちで暮らしてたじゃないか。オレだけじゃない、父さんや母さんともあんまり会えずにさ。それで今、おばあちゃんがこんだけ弱って

るんだろ。それって結局、神様がおばあちゃんをこんな目にあわせてたんじゃないか。違うかよ」

祖母の肩に回した腕がかたくこわばる。目を合わせないまま琢磨は言葉を続けた。

「オレ、おばあちゃんを苦しめたものを大事になんて思えない。父さんに相談すればいいじゃないか」

思わず祖母を睨んでしまいそうだった。祖母の大事なものよりも自分にとっては祖母自身の方が大切なのだ。祖母の生き様を否定して、祖母を傷つけている自覚はある。それでも、これを譲る気はなかった。

「琢磨、本当に優しい……立派になったねえ」

穏やかな声に、祖母を否定して自己嫌悪に陥っていた琢磨は顔を上げた。

声色そのままに、祖母は確かに笑っていた。

「違うよ、琢磨。私はひとりぼっちなんかじゃなかった。それに、これは琢磨にしか頼めないんだ」

「オレにしか？」

「錬磨も、朱鷺絵さんも、神様を知らない。でも琢磨、お前は神様と会ったことがあるんだよ」

「なんだよ、それ……」

「一気に話して、疲れてしまったよ。寝かせてくれるかい」

「あ、ああ」

祖母をそつと横たえ、琢磨は改めて布団の横に腰を下ろした。ふう、と長めのため息をつき、祖母が琢磨に目を向ける。

「琢磨、錬磨たちを呼んできておくれ。なるべく、急いでね」

「わかった」

祖母が人を急かすことは滅多にない。余計な口をはさまず、琢磨は部屋を後にした。

さつきまでの弱った様子が嘘のように、祖母は琢磨の両親それぞれと話し込み、話を終えると、また起こしていた上体を横たえ、ふうう、と長いため息をついた。

「あと、琢磨」

「なんだい、おばあちゃん」

「お願いだよ」

「……わかったよ」

気持ちの整理などつかないし、何をすればいいのかもよくわからない。だが、イヤだ、とは言えなかった。

琢磨の返事に満足げにうなずくと、祖母は目を閉じた。

「錬磨、朱鷺絵さん、琢磨、後藤さん、カナハさん、……みんな、ありがとうね」

ふうふう……と長い長いため息の中、祖母の全身から力が抜けていく。

そして、祖母は二度と息を吸わなかった。

1 - 4

月明かりの下、琢磨は本殿の陰に腰を下ろしていた。

医者二人は近くの町へ帰り、両親は葬儀の手配等を一通り済ませ、二人で話し込んでいる。

ただの高校生でしかない自分にやれることはなかった。

ゆるりと風が揺れ、神社を囲む森の木々が葉を鳴らす。

思ったより、涙は出なかった。ただその代わり、どうしようもなく気力が湧かない。きつと『心に穴が開いた』というのはこういう様子を指すのだろう。

祖母のことはいくらでも思い出せる。しかし当の祖母がもういない、という事実を意識するたびに、思い出しては浮かび上がる暖かな感情がどこかへ吸い込まれ色を失っていく。

「ひとりぼつちなんかじゃなかったって……まるで誰かが……」
「いたみたいじゃないか、とつぶやきかけて、ふと考え込む。そう
いえば、幼い頃、両親に連れられて帰省するたびに、この境内や周
囲の山の中で祖母以外の誰かと遊んだ気がする。」
「……誰だ？」

その頃は深く考えもしなかったが、そもそもこの神社は山奥にあ
る。ダムに沈んだ村から移設されたものだ。最寄の人里といえば、
車で数時間かかるふもとの町くらいしかない。わざわざそんな遠く
から、身内以外が訪ねてくるか？

確か……女だった気がする。長い黒髪で、そう、白衣に緋袴の巫
女装束だった。祖母の落ち着いた色合いの和服と好対照だったので
印象に残っていた。

名前は何と言っただろうか。結構短い響きで、漢字も教えてもら
っていたはずだ。

「紗凜……だったっけ」
「様を付けぬか」

「ああ、いつもそう言われてたよな。紗凜様　は！？」

息がかからんばかりの鼻先に、記憶どおりの顔。反射的にのけぞ
り、既にバランスを崩した状態で立ち上がるうとした拍子に、本殿
の壁に後頭部を打ち付けてしまい、頭の中に火花が散った。

「おおおおお……！！」

頭を抱えながら転げまわる。痛い。これは大変痛い。頭上から、
先ほどと同じ低女声アルトが聞こえた。

「おう、痛そうじゃない……大丈夫か？」

口調はともかく、綺麗な響きだ。

「大丈夫なわけねえだろ、っついでやそうじゃない、いつの間に現れ
たあんた」

「うぬがわしの名を呼んだときよ。もっと早はやう呼んでもらいたかつ
たものだが、何にせよ久しいな、琢磨」

腕組みと共に笑う、巫女装束に長い黒髪の美女。その頭からは、

鹿のそれに良く似た、枝分かれした一對の角が生えている。あからさまに人間離れした特徴に、記憶が一気に蘇る。記憶の中の祖母は、彼女をこう呼んでいた。

「竜神様　神様!？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1780z/>

かみさまといっしょ

2011年12月8日01時54分発行